
共同研究に参加して

安藤 保：九州大学文学部

平成8年度より岩崎宏之氏を代表とする重点研究「沖縄の歴史情報研究」中、「環東シナ海地域間交流史」を研究テーマとする川勝班に加わった。研究に参加するに当たって承知していたことは、(1) コンピュータを活用する歴史研究方法に関する実験的試み、(2) 人的ネットワーク作り、(3) 研究テーマに即した研究、が内容であるが(1)に主眼を置いた先端研究であるということであった。参加の時には既に研究が始められてから2年経過していたこともあり、文字通り「遅れてきた研究者」の一人であり、しかも研究会へも時間の都合もあり参加できないことも多く、現在も「未だ遅れたままの研究者」であるが、数回の研究会参加を通じてコンピュータ利用についての若干の知識を得たことは確かである。以下、二、三の感想を述べる。

1. コンピュータを活用する歴史研究の無限性

今までほとんどワープロ機能部分しか利用してこなかった筆者のコンピュータ歴からすれば、研究への参加は新たな目を開かしたと言える。特に、沖縄での研究会で示された現物よりも拡大して明確に処理された画像資料を見たときの驚きは未だ新鮮であり、研究の補助としてコンピュータが必須になるであろうとの思いを深くした。現実にはコンピュータの一部の機能しか利用できないであろうが、それだけでも大量の資料の伝達を容易にし、リアルタイムに連絡を取り合えるシステムを利用することにより、居ながらにして広範囲の研究者との共同研究を実現させる可能性を持つことを確信した。

2. 全国的なシステムの整備を早急に

マイクロフィルムに収めた史資料をコンピュータを通じた遠隔操作により自由に取り出せることは実験段階では実現しているが、これを実際の研究に利用するには全国的視野に立ったシステムの構築が必須である。どこにどのようなハードを置き、ソフトをどのようにして集積していくかは今後の課題である。地方にいる研究者にとっては、これにより東京偏在の史資料が自由に手に入る時期の早からんことを願っている。

3. 一つの試みに向けて

近世史研究にとり基礎データの一つに物価があるが、これに関する研究は、個別研究は山崎隆三『近世物価の研究』を初めとして進められているが、基礎となる物価表は1962年京都大学近世物価史研究会より「15～16世紀における物価変動の研究」が出されて、以来、必要性は求められながらも形としては出てきていない。コンピュータによる情報の交換は研究者が各地にいなからこれを集積する事を可能にする。筆者は九州大学内の研究者と共にこれに着手している。データの一定度の集積がなされた場合にはこれを情報として開放することを考えている。このような研究の方向性が出てきたところに、今回の研究参加の最大の意義があったと思う。